

# 100年が経過する南米日系社会の形成と変容

福井千鶴

Chizu FUKUI. One Hundred Years Later: Formation and Transformation of the *Nikkeijin* Society in Latin America. *Studies in International Relations* Vol. 34, No. 2. February 2014. pp. 67 – 76.

Many Japanese emigrated to Latin American before the Second World War. It began in 1899 when the first immigrants arrived in Peru. Another batch of immigrants arrived in Brazil aboard the *Kasato-Maru* in 1908. More than 100 years have passed then since these first immigrants arrived in Latin America. Their descendants, *Nikkeijin* are now fourth or fifth generation, In the light of this history of Japanese emigration, I first examine the historical definition and framework of the *Nikkeijin*, and then discuss the future of this framework and the transformation of the *Nikkeijin Society* today.

## はじめに

日本から南米への移住は、1899年にペルーの移住を皮切りとして1世紀以上が経過した。戦前戦後を通じて多くの日本人が南米諸国に移住した。特に、ブラジルへは1908年、第1回の移民船笠戸丸による移住を契機に日本人が多数移住し大きな日系社会が築かれた。ペルー移住、ブラジル移住が始まって戦前移住において100年余が経過する日系社会では、時代の経過とともに1世から2世3世の時代へと移り、今日は、4世～5世の時代へと移りつつある。同時に人種混交も進み、ブラジルでは新しく生まれている日系人の子孫たちの70%以上が現地人との混血の子供たちと言われている。当初の1世達の考えた日本の血の入った人たちを中心とする日系社会は、3世～5世の現地化した日系人が混入する日系人社会へと変容し、日系人の枠組みや日系人の定義を見直す時期に来ている。現地社会では、ここ20年ほど前から日系人社会の枠組みが議論され始め、日系人に関するシンポジウムも開かれるようになった。

本稿は、移住後1世紀以上が経過し、現地との混交や同化が進展する南米の日系社会の枠組みに関する諸問題の究明、日系社会の礎となった移住地の形成と形成形態、日系社会の変容について、多くの日系人の居住と都市への集住が進んでいる

ブラジルを中心に検討し、将来の日系社会の在り方と行方について考察するものである。

## 1. 南米日系社会における日系人の枠組みと日系人

### 1.1 日系人社会の枠組み

今日の南米日系社会では、第二次世界大戦前（以降戦前と呼ぶ）から100年余、第二次世界大戦後（戦後と呼ぶ）から50年余が過ぎ、現地化と現地人との混交が進み、日系人の枠組みが問題になっている。ブラジルでは、1908年、最初の日本人移民がブラジルに入植し100年余が経過している。当初の日本人1世夫婦の家庭から、2～4世の時代に移り、更には5～6世の時代へ移りつつある。特に、ブラジルでは後世代になるほど急速に現地との混交と同化が進み、日系人という意識と日本人というアイデンティティーから遠ざかり、1世時代に考えられた日系人の枠組みで処することができない時代になってきた。サンパウロ在住の学識者の間では日系人の枠組みを今後どのように考えて行くかに関する議論が起き、これに関するシンポジウムも開催されているが、どう処したら良いかの方策は見つかっていないのが現状である<sup>1)</sup>。

この現象は、特に、日系人が多数居住するブラジルのサンパウロ都市地域で進行している。これ

ら日系人が集住する移住地では、人種混交や同化が進んでいるものの、文化協会や日本人会や日本語学校など日系人のよりどころとなる組織体があり、求心力も有り、日系人の枠組みに関する議論は、それほど話題に上っていない。

表-1 ブラジルにおける日系人人口動態

カテゴリー	人数(千人)	割合(%)
1世	154	12.8
2世以下	1,046	87.2
合計	1,200	
2世の内訳(二世人口)	474	39.5
両親が日本人	337	28.1
1世 X 1世でない日系 <sup>*1</sup>	23	1.9
1世 X 非日系 <sup>*2</sup>	114	9.0
3世	461	38.4
4世	65	5.4
5世以降	1	0.1
不明	82	6.8

\*1 2, 3世の間に生まれた2世

\*2 混血2世

出所：小林正典編著『日系移民・海外移住・異文化交流の今昔』(朝日新聞社, 2004, 56頁)

この日系人の枠組みに関しては、ペルーのリマ首都圏、パラグアイのアスンシオン、ボリビアのサンタクルス、アルゼンチンのブエノスアイレスなどの都市地域で見られる現象であり、同化が進む都市部地域と日系人の集住する移住地地域とは異なる様相を呈している。

また、サンパウロ人文科学研究所の学識者やサンパウロ在住の日系人の方々への聴き取り調査によると、サンパウロの日系社会では、1世代、ブラジル生まれの2世代、日本生まれで幼少のころ移住してきた2世(準二世と呼ぶ)、戦前移住者と戦後移住者間に確執があり統合するような雰囲気がないこと、及び、日系人を統合させる求心力を持つ組織がない状況がみられる<sup>2)</sup>。

## 1.2 ブラジルにおける日系人人口と現地化の状況

日系社会の枠組みを考察する上で日系人の居住状況や人口動態を把握することは重要である。南米全体で日系人の人口動態を正確に把握した資料

は存在せず、幸いにしてブラジルでは入植80周年(1988年)を記念してサンパウロ人文科学研究所により行われた日系人の人口調査の資料があり、そのデータを基に類推することができる。世代別の混血状況は1988年のデータによれば、2世の混交率は6.03%、3世では42.00%、4世になると61.62%と世代が後になるほど混交が急速に進んでいる<sup>3)</sup>。この傾向から、その後の日系社会では日系社会の枠組みを検討する上で、聴き取り調査によると現在では70~80%と更に混交が進んでいることを考慮する必要がある<sup>4)</sup>。

1958年に日系コロニア(日系人社会をコロニアと称する)実態調査が行われ1960年の日系人口は430,151人<sup>5)</sup>であった。1988年の人口調査データによればブラジルの日系人の人口は約120万人<sup>6)</sup>で、60年から77万人が増加し、60年当時の約3倍になっている。1988年の数字には第5世までで日本人の血が少しでも混じっている者が含まれている。このうちの人口の内訳を表-1に示す。この表から分かるように1世の人口比率が12.8%、2世以下の人口比率87.2%と2世以下の人口が圧倒的に多くなっている。移住後100年以上が経過していることから1世の高齢化が進んでいる。61歳~98歳が8万3千人(6.9%)、46歳~60歳約5万人で61歳~98歳が一番多い<sup>7)</sup>。現在では、この分布状況は1世の数が減り、2世以降の増加により2世以下の人口比率が増大していると推測される。

## 2. 日系社会の形成と歴史的経過

南米における日系社会の形成の形態は、以下の5つに分類することができる。1) ペルーやブラジルに見られる、最初は契約労働者として入植し、後から自立して土地を購入し、自然発生的に集住し日系社会を築く形態(植民地と呼んでいる)、2) あらかじめ移住地として開拓された土地に集団で入植し日系社会を築く形態(移住地と呼んでいる)、3) 地方に点在する日系社会から都市部への転住者、及び、単独で移住し都市部に定住する日本人が形成する都市型日系社会、4) 一旦は移住地等に集住する日系社会に属していたが何かの事情により分散し個人的に農地を所有し農業を営んでい

表－2 コロノから自主農への移行推移状況  
(単位%)

年次	自作農	借地農	コロノ
1912	5.1	1.9	87.9
1917	16.1	8.7	66.0
1922	28.7	25.2	32.3
1927	26.7	19.7	41.0
1932	27.7	19.9	37.1
1937	35.5	33.1	19.5
1942	41.9	35.8	9.7
1947	51.2	33.9	6.6
1952	58	29.6	4.1
1958	64	28.4	2.9

出所：『ブラジル日本移民八十年史』

るか、最初から個人で農地を買い独立した土地で農業を営んでいる個人型の定住者で、日本人会や日系人会に所属し日系社会を築いている個人型の形態、5) 個人的に移住し現地社会に溶け込んでいる日本人が集まり小規模ではあるが日系人社会を形成している形態がある。

いずれの日系社会形成の形態においても、日本人会や自治会、文化協会、農業組合などの相互扶助を目的とした団体組織が創設され、今日の日系社会を築く礎となった<sup>8)</sup>。

次に、南米への日本人移住当初からの日系社会の形成形態について考察する。

## 2.1 自然発生型日系社会の形成

この形態はペルーやブラジルのように、最初、契約労働者として入植し、その後、自立し、自分の農地を手に入れ、自主農業へ転換した人々が自然に集合して集団農業地を形成し発展したものである。ブラジルでは1908年、笠戸丸でやってきた最初の移住者が契約労働者（コロノと呼ぶ）として、①ドゥモント、②フロレスタ、③サン・マルティーニョ、④カナン、⑤グアタパラ、⑥ソブラードの6つのコーヒー耕地に入植した。その後、2回目の配属地はグアタパラとサン・マルティーニョに、3回目グアタパラである。グアタパラには通訳として就任した。人望のある平野運平によって運営された。

コロノに対する農園主の扱いは大変ひどく、過

酷な生活を強いられ、逃走する者が続出した。ブラジルでは奴隷制度が廃止されていたために、日本から移住した契約農民たちは奴隷の代わりに使われた。この過酷な状況が影響して、そこから脱出する機運が高まり、1910年頃より自主独立する者が出てきた。表－2が示すように、20年代からコロノから自主農への移行が盛んになった。コロノから自作農や借地農へ転換する者が増大し、この時期、多くの植民地（コロノによって形成された集団営農地を植民地と呼んだ）が誕生した。サンパウロ近郷のスザノ、モジ、コチア、ジュケリーの植民地がこれに当たる。1950年代には移住者でコロノになっている移住者はほとんどなくなり自作農や借地農合わせて約90%に上っている。1908年笠戸丸の最初の移住者で、通訳としてグタパラに入植した平野運平は、1915年に平野植民地を起こしている<sup>9)</sup>。

このような自主独立による農業生産地が集合し植民地へ発展する形成形態はブラジル特有のもので、他の南米諸国では見られない現象である<sup>10)</sup>。また、これらの植民地では日本人会などの団体組織が形成され、相互扶助や学校などの建設が行われた。後になって、これらの組織が日系コロニアと呼ばれるようになった<sup>11)</sup>。

## 2.2 開拓された入植地で日系社会を形成

この日系社会の形成形態には、戦前に出来た移住地（植民地）と戦後に出来た移住地の二つの形成時期に分けることができる。

戦前のブラジルでは、海外移住組合連合会が現地代行機関有限会社ブラジル拓殖組合（通称ブラ拓）を設立し、ブラジル南部サンパウロ州を中心に集団自営開拓移住地を開拓し分譲した。それらは、バストス移住地（1929年）、チエテ移住地（1929年）、オリエンテ移住地（1934年）、ノーバ・アリアンサ移住地（1934年）フォルモーザ移住地（1934年）、トレス・バラス移住地（現パラナ州アサイ市、1932年）などである。

また、長野県（信濃海外協会）は第1アリアンサ移住地（1924年）で、信濃海外協会と鳥取県（鳥取海外協会）は共同で第2アリアンサ移住地（1926年）を、信濃海外協会と富山県（富山海外

表-3 日本海外移住振興株式会社の分譲地

移住地名	所在州	分譲開始年	日系人入植(人数)
バルゼア・アレグレ	MS	1959	53戸(244人)
フンシャル	RJ	1961	31戸(143人)
ジャカレー	SP	1961	33戸(210人)
グアタパラ	SP	1961	106戸(635人)
第2トメアス	PA	1963	83戸(382人)
ビニヤール	SP	1963	53戸(311人)
サン・ローレンソ	RJ	1976	2戸(7人)
アウリ・ベルデ	SP	1977	18戸(79人)

出所：ブラジル・ニッポン移住者協会『ブラジル日本移民戦後の移住50年』2004

注)

1. 入植戸数、人数は1986年4月1日現在

2. 所在州記号(州名)

MS：マッドグロッセ・スル

RJ：リオデジャネイロ

SP：サンパウロ

PA：パラ

協会)は共同で第3アリアンサ移住地を開設している。1929年、ブラジル北部のアマゾン地域にあるパラ州アカラ(現トメアス)移住地には日本人最初の移住者が入植した。

このように1908年、ブラジルに最初の日本人コロノが入植してから、独立し自営農に転向する動きが生じ、さらに、1920年頃自立機運が活発化し、民主導の植民地が多数生まれた。その結果、官による移住地開拓を押し進めることになり、その後、さらに多くの移住地が南米に創設されるようになった。また、パラグアイでは1933年にラ・コルメナに、民主道による最初の入植者が入植している。

戦後のブラジルでは日本海外移住振興株式会社(略称：移住振興)が(表-3参照)8つの移住地を造成し分譲した。ブラジル政府直営の植民地は、入植開始の1954年から1964年までに、北部地域で9、東北部地域で7、南部でラーモス移住地(1964年)を合わせて17である。戦後のブラジル移民は、1953年戦後初の呼び寄せで51人の独身青年がサントス港に到着した。また、828人の大勢の移民、及びコチア青年移民第1陣109人が1955年サントス港に到着している。

北部では1953年戦後初のアマゾン移民25家族54人がジュート栽培のためアマゾニア産業研究所の農園に、同年8月トメアス地域に25家族129人

が戦後初の移住者として入植した<sup>12)</sup>。

ボリビアへの移住は戦後から入植がはじまった。最初に1954年、オキナワ移住地、1955年、西川移民団、1957年、政府計画の第一陣がサンファン移住地に入植した。ボリビアではいずれの移住地も無償で50ヘクタールの土地が与えられた。パラグアイにはラパスとチャベスへ1955年、戦後最初の入植がなされ、アルゼンチンには1959年、ガルアペに最初の入植が行われた(表-4参照)。この同じ頃ブラジルでは32の移住地が存在していた<sup>13)</sup>。

表-4 南米諸国戦後移住地(1981年頃の状況)

国名	移住地名	入植開始年
ボリビア	コロニア・オキナワ	1954
	サンファン	1955 <sup>注1)</sup>
	サンファン〈政府計画〉	1957
パラグアイ	ラ・コルメナ	1936
	フラム(ラパス)	1955
	チャベス	1955
	アルトパラナ〈ピラボ〉	1960
	イグアス	1963
	アマンバイ	1956
アルゼンチン	ローマベルデ	1969
	エスペランサ	1967
	アルマ・フェルテ	1968
	ガルアペ	1959

出所：国際協力事業団『南米精図』帝国書院、1981年より筆者編集

入植年は、各移住地の移住年史より編集

注1：西川移民団が最初にサンファン移住地に入植。57年から日本政府計画による移住者が入植

### 2.3 都市型の日系社会形成

この都市型日系社会は、移住地や植民地から都市部に移動し日系社会を形成する形態と移住地や植民地から移動した人による発展形態ではなく、個人的に移住した者が都市部に住み、日系社会を形成する2形態が見られる。これらの日系社会の形成は、1) その国の首都に形成される、2) 移住地や植民地に比較的近い都市に形成される、3) 個人的に入国した者が、入国した地域の都市に居住し日系社会を形成する3つ形態がある<sup>14)</sup>。

首都に形成される形態では、ボリビアのラパス、パラグアイのアスンシオン、ペルーのリマ、アルゼンチンのブエノスアイレスなどの日系社会を上げることができる。移住地や植民地に比較的近い都市に形成される形態は、ボリビアのサンタクルス、パラグアイのエステやエンカルナシオン、コロンビアのカリ、ブラジルのパラ州の首都ベレン、サンパウロの地方都市などで形成されている日系社会を挙げることができる<sup>15)</sup>。ブラジルでは日系人が多く集まる大都市サンパウロがある。個人的に入国した者が地方都市で日系社会を形成する形態では、ボリビアのペルーやブラジルの国境に近いベニ県トリニダ市、ルレナバケ町、リベラルタ町、グアヤラメルン市、コビハ市、コロンビアのバランキージャ、ペルーのボリビアやブラジルの国境に近い地方都市に形成される日系社会がある<sup>16)</sup>。

移住地や植民地ではブラジルのサンパウロを除き、日本人会や自治会、文化協会、農業協同組合などが創設され、日系社会やコロニーを運営している。現在でも残っている移住地や日系社会では創設当初の役割を時代に合わせた形に修正し、継続運営されている。

### 3. 自治組織の形成と変容

これまで日本人の南米移住と植民地、移住地と日系社会の形成について見てきた。形成された日系社会では相互扶助や生活の安全を確保するため、同じ地域に集まった人々により日本人会や自治会などの集団組織（日本人会と総称する）がつくられた。これが日系社会における集合組織形成の始まりである。現在でも残る日本人会、文化協会は、今日の時代に沿うよう運営形態や事業活動を修正しながら発展してきた組織体といえる。それらの組織の運営は地域ごとに異なる性格を持つが、概ね共通の志向性をもつことから、本稿では、総称して「日系団体」と呼ぶこととする。本稿の課題である日系社会の枠組みを考慮する上で重要な要素となる。

#### 3.1 日本人会の組織と役割

植民地や移住地等の日系社会は初期には地方において形成されたが、その後、都市部でも日系社会が形成されていった。ここでは移住初期の日系団体を中心に考察し、次いで都市部の日系社会を論ずる。

日本人が集合し、自治組織としての日本人会が創設されると、植民地や移住地の管理、学校の建設と管理、行政的な役割、衛生と医療、道路管理や補修などの土木、教育、総務と事務、会員の支援、書記、冠婚葬祭などを公務とする事業が会の組織として行われた。これらの公事は、移住者の日本の経験を基に、つまり「日本の村」的性格をもった行動基準により運営された。このほか青年会、婦人会、日本人学校後援会、産業組合などの多くの団体が組織されていった。ブラジル最初の日本人会は1915年の桂植民地の「桂人会」といわれている<sup>17)</sup>。ボリビア、パラグアイ、アルゼンチンでは入植と同時に移住地に日系団体が設立されている。

#### 3.2 ブラジルにおける日系団体形成の歴史

##### 1) 日本人会の設立の動き

ブラジルへの入植者は、ボリビアやパラグアイ、アルゼンチンへの入植者と異なり、最初から集団移住地に入植し日系社会を築いたのではなく、契約労働者（コロノ）としてコーヒー園に入植した。その後自主独立して農地を手に入れ、集住することにより日系社会（植民地）を形成していった。自主農になった時期や場所が異なり、農地の購入ができる地域に点在するような形で形成された。このような背景からサンパウロ郊外の鉄道の沿線の開発と共に、その沿線に移動し入植していった。ノロエステ線やパウリスタ線などの沿線に集中していた。1920年頃のノロエステ線には1,048家族、32年カフェランジャ駅周辺には17植民地、28コーヒー農園耕地あり1,048家族が入植した。リンス駅周辺には39植民地、29コーヒー農園耕地が開拓された。1938年ノロエステ線とパウリスタ線の沿線には、214日本人会が設立されていた。1940年には、さらに480と日本人会の数は増大した<sup>18)</sup>。

## 2) 日本人会結集の動き（連合会の創設）

前記の、それらの沿線地域では植民地の入植や開発が活発であった。当然ながら近隣の植民地の日本人会と連携する動きが始まり、1921年「ノロエステ連合日本人会」「プロミツソ連合日本人会」「パウロ管内連合日本人会（パウリスタ植民地も含む）」の連合日本人会が生まれた。1938年サンパウロ市にブラジル中央日本人会が設立されたが2年後に解散している。その後、サンパウロ市には日系人組織の設立の動きはあるが、現在も実現できていない。サンパウロ市では日系人の間に求心力のある団体がなく、日系人のまとまりのなさを示している。

しかしながら日本の県人会レベルでは「ブラジル日本都道府県人会連合会」がサンパウロにある。48の県人会（文化協会、福祉教会、北伯福島県人会などを含む）で構成されており、日系社会の諸行事を行っている。また、それぞれの県人会は、北伯福島県人会を除きサンパウロ市内に設立されている。

### 3.3 ボリビアの日本人会と連合会

ボリビアには戦後形成された、オキナワ移住地とサンファン移住地の2つがあり、それぞれ日本人会の組織としてオキナワ日本ボリビア協会（通称オキナワ日ボ協会）、サンファン日本ボリビア協会（通称サンファン日ボ協会）が設立されていて、行政に関わる事業を行っている。いずれの協会も移住地開拓の当初より農業協同組合の性格を持った組織が創られ、その後、行政機能を協会に移し法人化している。

サンファン移住地には、1957年サンファン農牧総合協同組合が設立され、1965年農牧組合から行政事務を分離し日本人会に当たるサンファン日本ボリビア協会が設立された。一方、オキナワ移住地では、1955年コロニア沖縄農牧協同組合が設立され、1965年農業協同組合の行政事務を分離しオキナワ日本ボリビア協会が設立された。農業協同組合はコロニア沖縄総合農牧協同組合と称されている<sup>19)</sup>。

ボリビアの連合会は、最初ラパスに1981年「全ボリビア日系人連盟」として設立されたが、

経済環境の悪化でその活動を停止した。1996年サンタクルス市にボリビア日系協会連合会が設立された。この連合会にはオキナワ日ボ協会、サンファン日ボ協会、サンタクルス中央日本人会、ラパス日本人会の4団体が正会員として登録されている。準会員としてトリニダ日系人会、リベラルタ日本ボリビア文化協会、ギャラメリン日系人会、ルエナバケ日本ボリビア協会、バンド日系人会、それにサンファン農牧総合協同組合、コロニア沖縄農牧協同組合の2団体が会員になっている<sup>20)</sup>。

ボリビアでは、このように日系社会の組織は、連合会、及び、地域の大きな団体組織が連携した状態で日系社会がまとまっており、ブラジルの様な日系人の枠組みの大きな変容は見られない。しかしながら、戦前、ペルーやブラジルの国境近くに、ペルーやブラジルから離脱した日本人移住者が入植し、その子孫たちにより日系社会が築かれているが、サンタクルス地域の日系社会と異なり同化が進んでおり、ほとんどが現地化していると見て良い。オキナワ日ボ協会とサンファン日ボ協会、及び、農協団体は移住地内に団体組織が形成された団体組織で、日本人村的な雰囲気 of 移住地内にあるのが特色である。残りのサンタクルス市内、ラパス市内の団体組織は都市型の日系社会にある団体組織といえる。

表-5 パラグアイの日系社会団体組織

名称	設立年	形態
パラグアイ日本人会連合会	1970	連合会
チャベス日本人会	1955	移住地
ラ・コルメナ日本文化協会	1957	移住地
エンカルナシオン日本人会	1957	都市型
アスンシオン日本人会	1960	都市型
ピラポ日本人会	1966	移住地（JICA）
イグアス日本人会	1967	移住地（JICA）
アマンバイ日本人会	1970	コロノ→移住地
ラパス日本人会	1971	移住地（JICA）
エステ日本人会	1979	都市型
セントロ日系	1987	都市型

参照元：<http://rengoukai.org.py/ja/institucional/la-federacion/quienes-somos> より筆者編集

### 3.4 パラグアイの日本人会と連合会

パラグアイの移住地に形成された日系社会の団体組織であるパラグアイ日本人会連合会には、9つの日本人会・文化協会と1つの日系団体が加盟している（表-5参照）。団体組織には移住地型と都市型があり、アマンバイのようにコロノとして入植し、自主営農の農地を購入した人たちが集まり移住地へと変化したパラグアイ唯一のコロノによる日本人会がある<sup>21)</sup>。

## 4. 日系社会の枠組みについての考察

これまでに構成された日系社会は、すでに見てきたようにブラジルで多く見られるコロノから自主独立した人々によって形成された植民地に発展した日系社会と、あらかじめ用意された移住地に入植して発展した日系社会の二つがある。さらにそれらの日系社会から都市部に移動した日系人により作られた都市型の日系社会に分けることができる。植民地型にしても移住地型にしても、日系社会の形成の形態や創立の時期が異なっても、日本から移住してきた日本人が営農を目的として作った集団移住地にあることには間違いない。日系社会の枠組みを考える上でこの要素が重要な視点になる。

### 4.1 集団移住地における日系社会の枠組みの考察

集団移住地に住む初期の住民は、日本からブラジルに移住してきた日本人夫婦の1世がほとんどであった。彼らは現地語（ポルトガル語）がほとんどできなかった。その上に、彼らの移住地（居住地）は、南米に形成されたとはいえ「日本の村社会」がそっくり移されたような性格を持ち、そこに出来た日本人会は、日本の村社会の規範を強く反映し、運営されていた。このような日本人会によって支えられた戦前からの集団移住地は80年から100年以上が経過したし、戦後の集団移住地も50年以上が経過し、今日に至っている。

この集団移住地は1世の支配が強く、その支配も長かったため、日本人会はその影響を強く受けてきた。その枠組みも日本人の血を持つ1世や日本人の血を濃く受け継いだ2世で構成され、運営

されてきた。そのため、この集団移住地では日本語や日本の風習や文化が残っていて、日本村の様相を呈している。しかしながらこの社会においても、近年、現地人との混交が進み、日本語や日本文化の継承が問題になってきている。2世の中でも現地で生まれたことから現地人の意識を強く持つ日系人も存在するようになった。日頃のお互いの会話では現地語のスペイン語やポルトガル語での会話が用いられている。1世同士や1世と2世では日本語を使った会話が多いが、2世や3世間での会話では現地語の会話になっている。

ブラジルは欧州諸国からの移民、アフリカからの移民、原住民（インディヘナ）及び他民族との混血、日本をはじめとする黄色人種の移民などによる多種の民族が混在する国である。しかし、移民などの多国籍移住者に対して受け入れが寛容で異民族の人々が生活し易い国でもある。このようなことが背景にあるので、日本人との混交も拒絶されることなく、むしろ、日本人はブラジル社会において優秀な民族、信頼のおける民族、真面目な民族と高く評価され、日本人との結婚を希望する者が多い。また、日本人も他民族との混交に拒絶感はなく、ブラジル人の寛容さと重なって3世以降の世代で急速に混交が進み、現地化が進行したと考えられる。このようなことから現地化が進んだ日本人の子孫（日系人）を日系人の枠組みとしてどのように見るかが日系人社会で大きな問題になっている<sup>22)</sup>。

日本人的性格の強い日本人会とはいえ、時代が進み2世、3世や3世以降の世代が多くなり、これまでの1世の考えや日本の村社会の規範を基にして運営されてきた日本人会は日系人という枠組みを再考する必要に迫られる時代になった。また、これまで温存してきた日本の文化や日本語をどのように継承してゆくかも大きな課題になってきた。

### 4.2 都市型日系社会の枠組みの考察

都市型の日系社会は、集団移住地からの家族、個人的な転住組、高等教育を受けるために転住しそのまま移住地に帰らず居住する者、集団移住地には入植せず直接都市部に居住し都市部の日系社会に入る者などで構成される。

この日系社会では、日本人や日系人が一緒に集団で生活することはほとんどなく、都市社会に個々に分散して生活する。集団移住地社会に比べ、現地社会に入り生活する機会が多く、現地化の進展と混交が急速に進んだ社会となっている。時代が進むにつれ2世や3世や3世以降の世代が多くなり、これまでの1世の考えや日本の村社会の規範を基にして運営されてきた日本人会と日系人という枠組みでは物事を処することができない社会となってきている。

日系社会を研究しているサンパウロ人文科学研究所による聴き取り調査（2013年8月と9月実施）によれば、特に、サンパウロ市の日系社会ではその傾向が強く、2世や2世以降の世代の多くが日本人会の組織に関心が薄く参加しないために、日本人会の組織化が出来ず、求心力を持つ柱のない日系社会になっていることが分かった。

現地で生まれた2世や3世からみれば、日本は遠い国で両親の生まれた国であり、ともすれば、彼らには、日本は直接関係ないことと考える向きもあり、日本を背景に考える日系社会に関心を持たず、日系社会に参加しない風潮が出てきているのも事実なのであるが、現地から見る日本は、日本政府の政策が東南アジア諸国やアフリカを重視し南米諸国に目を向ける度合いが少ないととられている。また、日本の社会が南米日系社会や南米日系人を軽視する風潮があると感じられ、そのため日本が大きな魅力のある国に見えず、日本への興味が薄れているのが現状である。これらのことから、今日の現地の日系社会に対応するには、現地生まれの日系人による「日系人コミュニティ」の志向を考える必要があり、かつ、日本をもっと魅力のある国に見えるような施策が必要と考えられる。

多くの日系人が居住するサンパウロ市には、現在、日系人に対して強い求心力を持つ団体組織がなく、日系人を東

ねる組織もないのが現状で、日系社会の行く末が案じられる状態である。

ここに述べたように都市部では集団移住地の日系社会とは異なり、同化と混交が急速に進んでおり、3世とそれ以降の日系人は日本人としての血が薄くなっている。特に、サンパウロ市ではその現象が強く、これまでの日本村的規範の性格を持つ日系人の枠組みに入れてよいか議論的になっている。現代の日系社会がどうあるべきかを考え、日系社会の1世の時代を中心にして策定された規範を現代の日系社会に合った規範に修正し運営することを考えた日系社会に変化させることが現代の課題である。

#### 4.3 サンパウロ市への日系人の集住について

日系社会の枠組みを考える上で、大きな日系社会を形成しているサンパウロ市へ何故日系人が集中し、どのように日系社会が築かれたか、その要因を考察する必要がある。1958年と1988年の日系社会の人口分布を示す、表-6からも分かるように、サンパウロ市とサンパウロ大都市圏における人口は、1958年12万人（27.9%）であったが、1988年には約50万人（40.3%）と約4倍に増加したように、サンパウロ圏への人口集中が著しい。入植当初よりサンパウロ州内のコーヒー耕地に入植したコロノが、独立し州内で植民地を形成した

表-6 地域別日系人口分布

地域別日系人口（1988年）

地 域		1958年		1988年	
北 部		5,227	1.2%	33,000	2.7%
東 北 部		1,765	0.4%	28,000	2.3%
東 南 部	サンパウロ市	70,000	16.3%	326,000	26.5%
	サンパウロ大都市圏	50,000	11.6%	170,000	13.8%
	リオ・デ・ジャネイロ州				
	エスピリット・サント州	8,847	2.1%	87,000	7.1%
	ミナス・ジェライス州				
その他サンパウロ州		205,520	47.8%	391,000	31.8%
東南部合計		334,367	77.7%	974,000	79.3%
南 部		78,097	18.2%	143,000	11.6%
中 西 部		10,679	2.5%	49,000	4.0%
合 計		430,135	100.0%	1,228,000	100.0%

出所：サンパウロ人文研究所『ブラジルにおける日系人口調査報告書』表2-3

り、「ブラ拓」の移住地が造成され分譲されたなどの経緯があったため、サンパウロ州を主体とする東南部地域では日系人が、1958年には33万4千人（77.7%）、1988年には97万4千人（79.3%）と飛躍的に増大した。

人口の増大の要因は、子供の教育のために田舎の移住地から転住した者、職を求めて転住した若者たちが、大都市圏の経済の活発なことに期待を寄せてサンパウロ市やその近郷に農地を求め転住し農業を営む（近郊型農業）者などを挙げることができる。近郊型農業を営む者は都市部の市場などで農産物の販売することにより直接現金を手にすることができた。特に、野菜栽培や果実栽培は栽培面積が小さくても、現金収入が確実で、子供の教育の面倒を見ながら、生活を維持することができた。表-7の近郊型農業の増加（全農業生産に占める割合）が示すように、近郊型農業へ作付転換する農家が増大した。

表-7 日本人農家の主要農産の変遷  
(1912~1947)

(単位%)

年次	コーヒー作農業	綿作農業	米作農業	近郊型作物農業
1912	92.6	1.2	25.0	0.6
1917	76.8	4.5	9.5	4.2
1922	52.0	12.1	17.6	10.2
1927	62.2	11.1	10.5	11.1
1932	59.0	14.0	8.3	13.0
1937	32.1	39.0	6.0	14.5
1942	24.3	39.3	4.5	19.9
1947	23.6	31.2	3.8	27.5
1952	27.5	20.5		34.1
1958	28.3	8.5		42.3

出所：『ブラジル日本移民八十年史』107頁

## 5. おわりに

南米の日系社会は、日本からの移民が現地に入植してから戦前移住から100年余が経過し、戦後移住でも50年余が経過している。この長い移民の歴史の中で、入植当初の1世夫婦や1世の単身者の生活から始まった日本人移民による日系社会が、

年月を経るとともに、現地人との混交が進展し現地生まれの2世やそれ以降の世代が生まれた。彼らが日系社会に組み入れられることによって日系社会の現地化が一層進んだ。

1世達が築いてきた日本人村的な規範によって運営されてきた日系社会は50年~100年余が経過した。戦後の1世も高齢化が進み減少し、2世、3世、及びそれ以降の世代が急激に増大し変容しつつある。今後の日系社会を継続し運営するには、2世や3世、及び、それ以降の世代が関心を示すように、これまでの伝統的な規範による日系社会の運営から、現地生まれの日系人の発想を取り入れた日系社会の規範によって運営される日系社会に変化させていく必要がある。

この新しい日系社会の構築には、現地生まれの日系人が祖先の故郷である日本の社会をどのように捉え、その遺産をどのように取り入れるかが組織の性格を位置づける上で大きな鍵になる。1世から見て残念なことに、現地生まれが故に日本への興味が希薄になっていたり、全くその意識がないなどの現象が起きている。このような環境を生んでいるのも日本の社会が南米移民とその子孫に対する関心が薄いことが一つの要因になっているといえる。

今後の日本の社会は、食糧自給率の低下や高齢化が進む中で、南米日系人の起用や登用、生産される農産物などの輸入を積極的に進めるべきであろう。また、日本を魅力的に見せることも必要である。優秀な南米日系人は、残念なことに日本社会の南米人に対する冷遇や蔑視などから日本を嫌い、同格で扱われ、実力があれば優遇されるアメリカ、カナダやオーストラリアに働きに出ている現状がある。

今後の日系人社会は同化の進展により、特に、ブラジルでは、遠からず日系社会は消滅し、現地社会に吸収されるであろうと、考えられる。この時に日系の軌跡とイメージ、及び、彼らのアイデンティティーをどのようにして残すかが課題になる。その一つは日本の文化の継承であり、現地人に対し日本文化の認知度を高めることと日本文化に慣れ親しむ習慣を付けさせることであろう。これを実現するための方策を考案することと実施す

ることで、そのための資金を日本社会が提供することができるかにある。結論として、日系人の足跡を残すために日本文化の継承と普及を日本社会と現地日系社会が連携して、積極的に現地社会で実施し推進する具体的なプログラムが待たれる。

### 参考文献；

1. 日本移民80年史編集委員会『ブラジル移民八十年史』移民80年祭典委員会，ブラジル日本文化協会，1991
2. 小林正典編著『日系移民・海外移住・異文化交流の今昔』(株)今井書店，2004
3. ブラジル・ニッポン移住者協会『ブラジル日本移民 戦後移住の50年』ブラジル・ニッポン移住者協会，2004
4. 福井千鶴『南米日系人と多文化共生』沖縄観光速報社，2010
5. サンパウロ人文科学研究所『ブラジルに於ける日系人口調査書』1987・1988
6. サンパウロ人文科学研究所『日系社会実態調査報告書』2002
7. 宮尾 進『ボーダーレスになる日系人』サンパウロ人文科学研究所，2002
8. ボリビア日本人移住100周年移住史編纂委員会『ボリビアに生きる』ボリビア日系協会連合会，2000
9. パラグアイ日本人連合会・パラグアイ日本人移住70年誌編纂委員会『パラグアイ日本人移住年誌・新たな日系社会の創造』パラグアイ日本人連合会・パラグアイ日本人移住70年誌編纂委員会，2007
10. 国際協力事業団『移住地概要』国際協力事業団，1998
11. 国際協力事業団『移住地概要 II』国際協力事業団，1999

### 注

- 1) 2013年8月サンパウロ人文科学研究所宮尾顧問の聞き取り調査より。
- 2) 2013年8月サンパウロ人文科学研究所宮尾顧問，及び

研究所の職員の聞き取り調査より。

- 3) サンパウロ人文科学研究所『ブラジルに於ける日系人口調査書報告書1987・1988』表2-20
- 4) 2013年8月及び9月サンパウロ人文科学研究所宮尾顧問，及び研究所の職員の聞き取り調査より。
- 5) 出所：小林正典編著『日系移民・海外移住・異文化交流の今昔』(株)今井書店，2004，48頁
- 6) サンパウロ人文科学研究所『ブラジルに於ける日系人口調査書報告書』1987・1988によれば1,228千人と1987年7月調査時現在推計されているデータもある。
- 7) 出所：小林正典編著『日系移民・海外移住・異文化交流の今昔』(株)今井書店，2004，56頁
- 8) 出所：日本移民80年史編集委員会『ブラジル日本移民八十年史』移民80年史編集委員会，ブラジル文化協会
- 9) 同上書，36，51頁
- 10) 筆者の南米各地の日本人移住地を訪問聞き取り調査から得られた成果による。
- 11) 宮尾 進『ボーダーレスになる日系人』サンパウロ人文科学研究所，2002，89～198頁
- 12) 出所：小林正典編著『日系移民・海外移住・異文化交流の今昔』(株)今井書店，2004，48頁
- 13) 出所：国際協力事業団『南米精図』帝国書院，1981年印刷版
- 14) 筆者の南米各地の日本人移住地を訪問し，現地の踏査，及び聞き取り調査から得られた成果による。
- 15) 筆者の南米各地の日本人移住地を訪問し，現地の踏査，及び聞き取り調査，並びに移住地関連の記録誌から得られた成果による。
- 16) 筆者の南米各地の日本人移住地を訪問し，現地の踏査，及び聞き取り調査，並びに移住地関連の記録誌から得られた成果による。
- 17) 出所：日本移民80年史編集委員会『ブラジル日本移民八十年史』移民80年史編集委員会，ブラジル文化協会，114頁
- 18) 出所：日本移民80年史編集委員会『ブラジル日本移民八十年史』移民80年史編集委員会，ブラジル文化協会，116頁
- 19) ボリビア日本人移住100周年移住史編纂委員会『ボリビアに生きる』ボリビア日系協会連合会，2000
- 20) ボリビア日系協会連合会ホームページより，www.fenaboja.com
- 21) パラグアイ日本人連合会・パラグアイ日本人移住70年誌編纂委員会『パラグアイ日本人移住年誌・新たな日系社会の創造』パラグアイ日本人連合会・パラグアイ日本人移住70年誌編纂委員会，2007
- 22) 筆者の南米各地の日本人移住地及びサンパウロの人文科学研究所，新聞社を訪問し，現地の踏査，及び聞き取り調査から得られた成果による。